

薬学生の共感的態度に及ぼす模擬患者の影響

Impact of the simulated patient on empathic attitude of pharmacy students

毎熊隆誉*^{1,2} 島田憲一*¹ 小野浩重*¹ 江川孝*¹ 柴田隆司*¹
西村多美子*¹ 塩田澄子*¹ 前田純子*² 五味田裕*¹ 手嶋大輔*¹

Takayoshi maiguma*^{1,2}, Kenichi shimada*¹, Hiroshige ono*¹, Takashi egawa*¹, Takashi shibata*¹,
Tamiko nishimura*¹, Sumiko shiota*¹, Junko maeda*², Yutaka gomita*¹, Daisuke teshima*¹

キーワード：模擬患者、共感的態度、客観的評価

Keyword ; simulated patient, empathic attitude, objective evaluation

要旨：本研究の目的は、心理尺度を用いて薬学生の共感的態度に対する模擬患者参画型演習の教育効果を客観的に評価することである。77名の薬学部3年生全員が同一のシナリオを用いてProblem-based Learning形式のグループ学習および模擬患者とのロールプレイを経験した。客観的評価として、演習前後に共感経験尺度（角田、1994年）および他者意識尺度（辻、1993年）の2つの尺度を用いて調査を行った。併せて、本演習の有用性に関する主観的なアンケートも実施した。結果、演習後に共感的側面において共有経験（ $p=0.003$ ）が、また他者意識の側面において内的他者意識（ $p=0.037$ ）がそれぞれ有意に増加した。主観的なアンケートにおいては、本演習が患者の気持ちを理解するのに役立つとする回答が最も多かった（平均4.53点／5点満点）。これらの理由として、学生個々の言動や態度に応じた模擬患者からのフィードバックが共感性の向上に重要な役割を果たしており、また、グループ内で個々のロールプレイとフィードバックを共有したことが他者への注意力向上に寄与したと考えられる。したがって、模擬患者を積極的に活用した演習は、薬学生の共感性と医療者としての適切な態度を育成する上で有用なツールとなると思われる。

Abstract ; The aim of this study was to evaluate objectively the educational effect of simulated patients for empathic attitude of pharmacy students by psychological scales. By using same scenario, all of 77 pharmacy students in the third grade experienced patient's problem based learning, followed by the role-play with simulated patient. For the objective evaluation, we carried out a investigation using two psychological scales, the empathic experience scale revised (Kakuta, 1994) and the other-consciousness scale (tsuji, 1993) before and after the communication training. And, we also investigated the subjective questionnaire about the usefulness of this practice. As the results, the sharing experience in the empathic aspects ($p=0.003$) and the internal other-consciousness in the other-consciousness aspects were significantly increased after practice ($p=0.037$), respectively. The most answer that this practice was helpful to understand the patient's feeling was obtained in the subjective questionnaire (an average of 4.53 points / 5 point perfect score). That is a reason why the individual feedback from a simulated patient to student about behavior and attitude in the medical interview might play an important role in the advancement of empathic attitude. Additionally, it is expected that sharing each feedback and role-play contributed to improvement of the attentiveness to others. Therefore, it seemed that the clinical communication practice utilizing the simulated patients aggressively would become a useful tool for cultivating the empathy and appropriate attitude as a medical staff.

所属：*¹ 就実大学薬学部

*² NPO法人響き合いネットワーク・岡山SP研究会

*¹ Shujitsu University School of pharmacy

*² Okayama Simulated Patient Association

緒言

患者と医師の信頼関係が良好であれば薬物の治療効果が増大することが知られている¹⁾。薬物療法の責任者である薬剤師が医薬品の有効性と安全性を確保して患者のquality of lifeを向上させるためには、患者と良好な信頼関係を築き、患者の思いや生活背景に関する情報を十分に引き出した上での投与設計と服薬支援、および患者の理解に合わせた説明が必要となる。そこには、温かく優しい、そして真剣に患者と向き合う態度が必須であり、態度教育としてのコミュニケーション教育が必要不可欠である。

平成21年度より導入された薬学共用試験OSCEを契機として、全国の薬系大学において模擬患者（SP）参画型の演習が広く行われてきている。しかしながら、人数や質などSPの人的制限や演習の時間的制約のために学生全員がプロのSPより個別のフィードバックを受けるといった演習形態は少なく、全ての薬系大学で行われているわけではない。また、SP参画型のコミュニケーション演習（SP演習）の有用性について受講者の感想などによる主観的な報告²⁾はあるが、SP演習の有用性を客観的に示した研究はほとんどない。そこで今回、薬学生に与えるSP演習の教育効果について心理測定尺度を用いて検討を行った。

方法

1. SP演習の方法

平成23年度、77名の薬学部3年生を5-6名から成る13グループに分けて1クールを3日間で実施した。各クールでは、まずProblem-based Learning形式のグループ学習を2日間実施し、第3日目にSPとのロールプレイ演習を行った。これを異なるシナリオを用いて2クール実施した（第1クール；ドラッグストアにおける一般用医薬品・鼻炎用薬の販売、第2クール；小児喘息患者に対

する病棟での退院指導）。第3日目、Fig. 1に示すように、グループ学習を踏まえて全員が異なるSPと医療面接ロールプレイを実施し、個別のフィードバックを受けた（Fig. 1 A）。1回のロールプレイ当たり、薬剤師役1名、観察者（コメント係）2名、司会進行係1名をあらかじめ指定しておき、1回当たり5分間のロールプレイと観察者からの感想およびフィードバックを含めたふり返りが合計10分以内で終了するようした（Fig. 1 B）。各ロールプレイごとに学生は役割を交代し、全77名の学生に対して計6回実施した。SPもロールプレイごとに隣のグループに移動した。学生は自身が面接したSPだけでなく、グループ内の他学生が背景の異なる別のSPとの面接も見学し、違う想定患者の患者応対についても疑似体験ができるようにした（Fig. 1 C）。2クール終了直後、学生に対して本SP演習の有用性に関するアンケートを実施した。

2. 心理測定尺度を用いた共感性評価

全2クールから成るSP演習の前後に、心理測定尺度を用いた記名調査を実施した。本研究結果は今後の演習を改善する目的にのみ使用すること、また、学会等で結果を公表する可能性があることを説明し、その趣旨に賛同した者のみが記名した。

対人態度における共感性の測定には1994年に角田が報告した共感経験尺度（Empathic Experience Scale Revised; EESR）を用いた（Table.1）³⁾。ここでいう共感性とは「能動的または想像的に相手の立場に自分を置くことで自分とは異なる存在である他者の感情を体験すること」と定義され、他者理解に至らない“同情”とは区別される。EESRは他者と感情を分かち合った経験（共有経験）と他者の感情を感じとれなかった経験（共有不全経験）の二因子から共感性が評価される。共有経験のみでなく、共有不全経験を併せて測定することで自己と他者の個別性を評価するこ

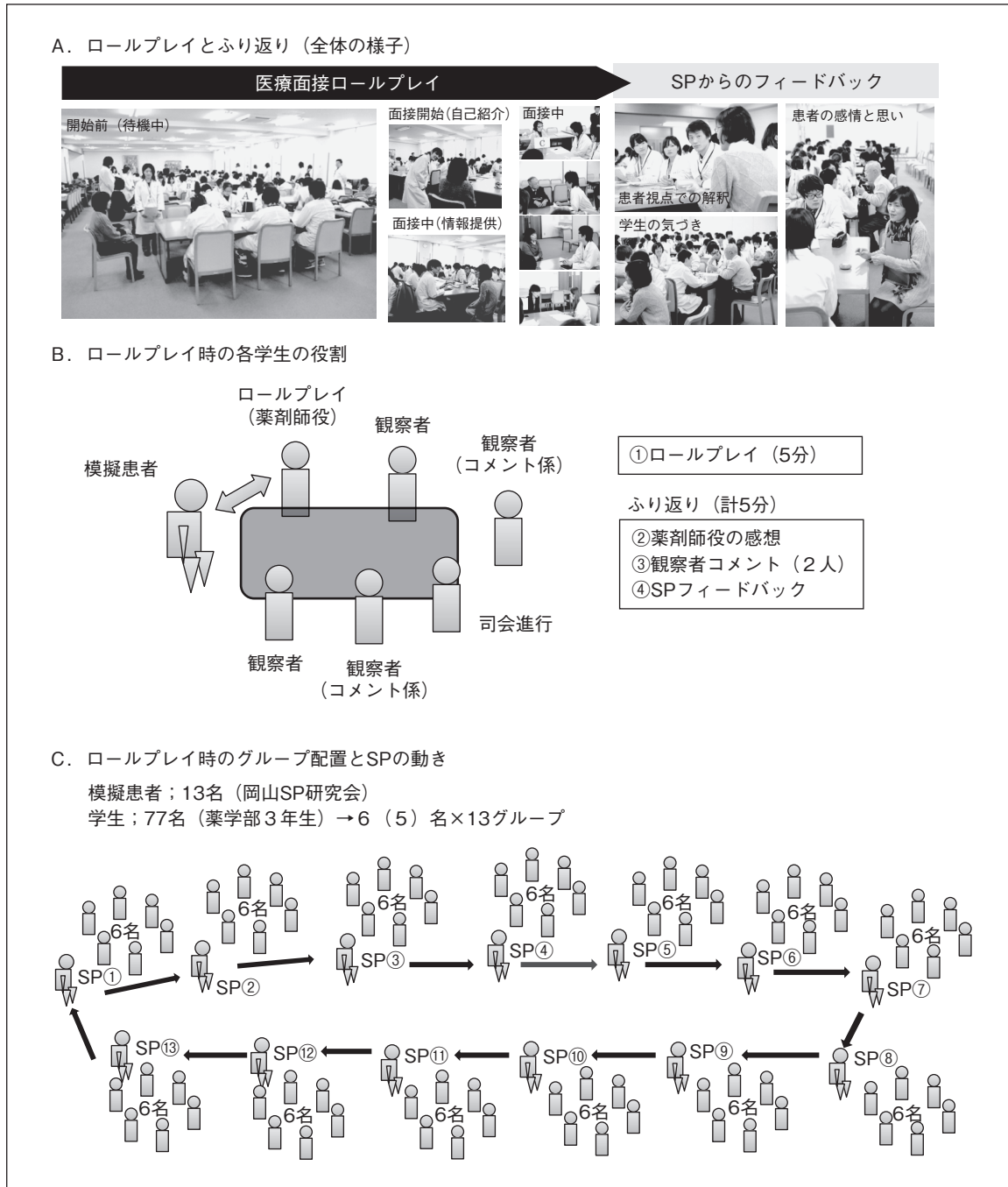


Fig. 1 SPとのロールプレイ演習 (各クール第3日目) の概要

とが可能となり“共感”と“同情”を識別できる。また、角田はEESRの結果について対象集団の中央値を基に共感性を4領域に類型化し、共有経験と共有不全経験が共に高得点群であるものを最も共感性の高い群としている。本検討ではEESRを演習の前と後に実施するため、例え同じ共有経験スコアを有する学生でも演習前後の集団の中央値の変動に

伴って高得点群か低得点群かが変わってしまう。つまり、類型化された結果を比較しても演習前後における学生個々の共感性の変化が正しく読み取れない場合がある。そこで本検討では、学生個々の共有経験、共有不全経験、およびそれらの総和スコアを用いて論じることとした。一般に、共感的な回答内容は社会的に望ましいとされるため質問紙を用いて測

Table. 1 共感経験尺度改訂版 (EESR)³⁾

以下に書かれている各文が、どの程度あなたの過去の経験にあてはまるかを答えて下さい。		
全くあてはまらない	どちらともいえない	とてもあてはまる
0	1	2
3	4	5
6		
1. 腹を立てている人の気持ちを感じとろうとし、自分もその人の怒りを経験したことがある。		
2. 悲しんでいる相手の気持ちを感じとろうとして、自分もその人の悲しさを経験したことがある。		
3. 何かに苦しんでいる相手の気持ちを感じとろうとし、自分も同じような気持ちになったことがある。		
4. 不快な気分である相手からその内容を聞いて、その気持ちを感じとったことがある。		
5. 相手が何かを怖がっているときに、その人の体験している恐ろしさを感じとったことがある。		
6. 相手があることに驚いたと語るとき、その人の驚きを自分も感じとったことがある。		
7. 相手が何かを期待しているときに、そのわくわくした気持ちを感じとったことがある。		
8. 相手が楽しい気分になっている場合に、その楽しさを感じとろうとし、その人の気持ちを味わったことがある。		
9. 相手が「こんなことがあって、とてもびっくりした」と話すのを聞いて、その人の気持ちを感じとろうとし、自分も驚いた気持ちになったことがある。		
10. 相手が喜んでいいるときに、その気持ちを感じとって一緒にうれしい気持ちになったことがある。		
11. 相手が何かに腹を立てていても、自分はその人の怒りがびんとこなかったことがある。		
12. 悲しんでいる相手といても、自分はその人のように悲しくならなかったことがある。		
13. 相手が何かに苦しんでいても、自分はその悲しさを感じなかったことがある。		
14. 不快な気分である相手からその内容を聞いても、自分は同じように不快にならなかったことがある。		
15. 相手が何かを怖がっていても、自分はその怖さを感じなかったことがある。		
16. 相手があることに驚いたと語っても、どうしてそんなに驚くのかわからなかったことがある。		
17. 相手が何かを期待していても、同じようにわくわくしなかったことがある。		
18. 相手が楽しい気分でも、自分はその人のように楽しく感じなかったことがある。		
19. 相手が「こんなことがあって、とてもびっくりした」と話すのを聞いても、自分は驚いた気持ちにならなかったことがある。		
20. 相手が何かに喜んでいても、自分はうれしい気持ちにならなかったことがある。		
※質問項目 1-10が共有経験尺度、11-20が共有不全経験尺度		

定した場合には偽りの反応が出る可能性がある。それを最小限にするためにEESRでは過去の経験に基づいて測定するようになっていいる。今回、EESRの導入時には「質問項目の内容をよく読み、皆さんの過去の経験を踏まえて回答して下さい」と説明を加えて実施した。

また、1993年に辻が報告した他者意識尺度も用いた (Table. 2)⁴⁾。この他者意識も共感性を考える上で重要な概念であり「他者へ注意や関心の向けやすさに関する性格特性」と定義されている。他者意識は、相手が直接目の前に存在する場合に働く内的他者意識と外的他者意識があり、また、他者が現前しなくても働く空想的他者意識の3つに大別される。今回、相手の気持ちや感情など他者の内面に対する意識 (内的他者意識)、化粧・服

装や体形などの外面への意識 (外的他者意識)、および他者についてイメージしたり空想をめぐらせたりする空想的他者意識についてもSP演習の前後に測定した。

統計解析はIBM SPSS Statistics 19 for Windows (IBM, New York) を用いて行った。演習前後の心理測定尺度の変化についてはWilcoxon符号付き順位和検定を行い、その際の有意確率が0.05未満を統計学的に有意な差があるとした。

結果

SP演習の直後に実施した本演習の有用性に関するアンケート (有効回答者74名) では、患者の気持ちを理解するのに役立つという項目の評価点 (平均4.53点 / 5点満点中) が最も高かった。しかし、他職種 (医師、

Table.2 他者意識尺度⁴⁾

人は他の人についていろいろなことを意識したり考えたりするものですが、あなたの場合はいかがですか。次のような他者への意識はどの程度あなたにあてはまるでしょうか。普段のあなたに最も近いと思うところを選んで下さい。

【選択肢】

5. 全くそうだ 4. そうだ 3. どちらともいえない 2. ちがう 1. 全くちがう

1. 他者の心の動きをいつも分析している
2. 人の考えを絶えず読み取ろうとしている
3. 人のちょっとした気分の変化でも敏感に感じてしまう
4. 他者の態度や表情を気をつけて見るようにしている
5. 人の気持ちを理解するように常に心がけている
6. 人の言動には絶えず注意を払っている
7. 他者のちょっとした表情の変化でも見逃さない
8. 人の外見に気をとられやすい
9. 表面的な他者の印象に心を奪われやすい
10. 他者の服装や化粧などが気になる
11. 人の体型やスタイルなどに興味がある
12. 人のことをよく空想する
13. 人のことをあれこれと考えていることが多い
14. 人のことにしばしば思いをめぐらす
15. 人のことがいろいろと心に浮かぶ

※質問項目1-7が内的他者意識尺度、8-11が外的他者意識尺度、12-15が空想的他者意識尺度
 ※実施時には、質問項目の配列順序をランダムに並べ替える。

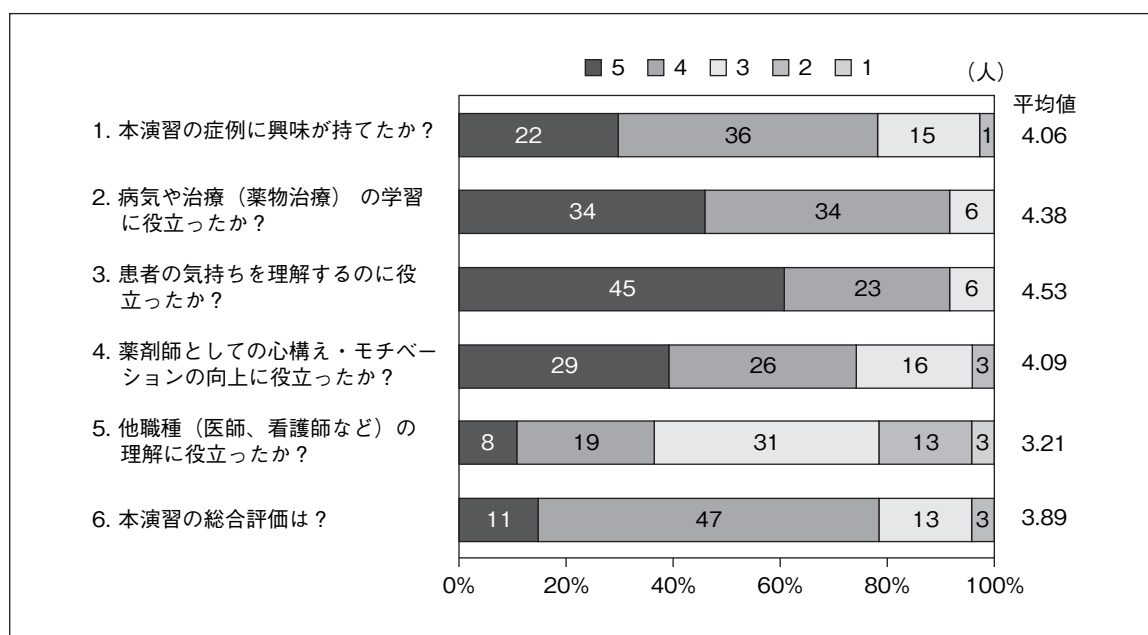


Fig.2 SP演習の有用性に関する主観的なアンケート結果

看護師など)の理解に役立ったという項目は平均3.21点と最も低い評価点であった。本演習の総合評価は平均3.89点であった (Fig. 2)。

ふり返りの際の学生のコメントとして「肘をつかない」、「“じゃあ”という言葉を使いすぎた」、「こちらが落ち着き、相槌・うなずき、目を見ることで相手に安心感を与えるこ

とが出来る」、「自分の予想と違う答えが返ってきた」などがあった。SPのコメントとして「健太郎君のお母さんですか？退院おめでとうございますと笑顔で言われるとなんて嬉しいんだろうと思えました」、「うちの子が(吸入薬を)うまく吸えなかったから悪かったんでしょうか？と聞くと、…(考えなが

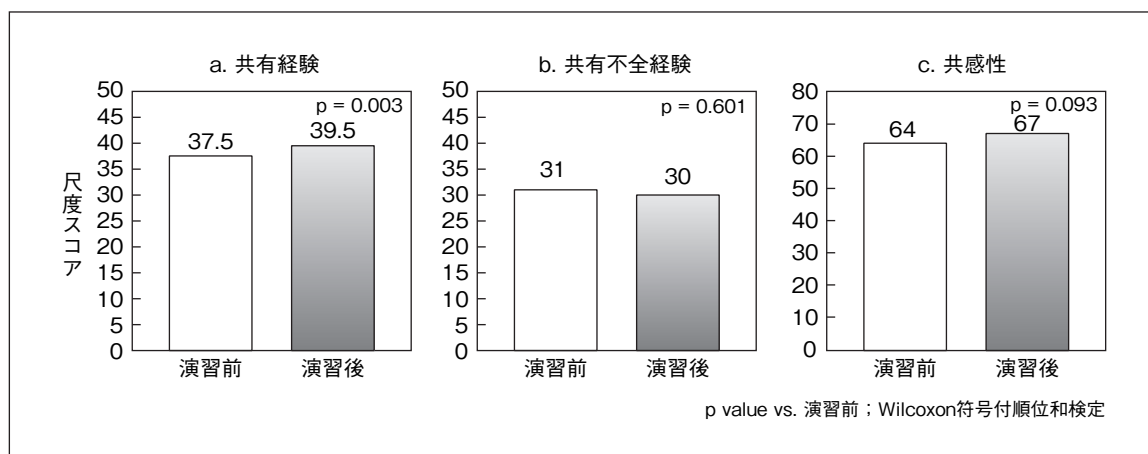


Fig. 3 演習前後における学生の共感性の変化

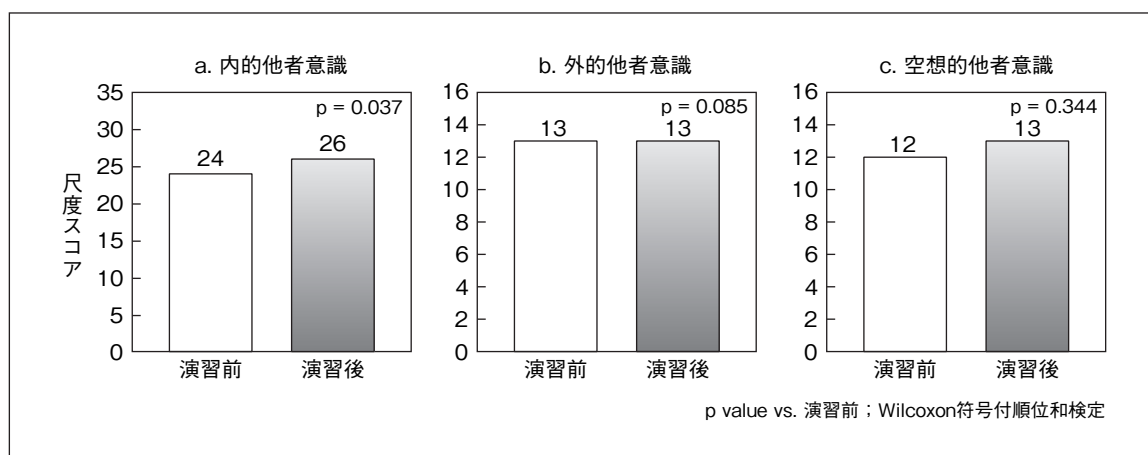


Fig. 4 演習前後における学生の他者意識の変化

ら)「そうですね…と言われたのは辛かった」、「先生の指示がまずかったです (薬剤師) …どんどん不安になりました」などがあった (data not shown)。

心理測定尺度を用いて調査した結果 (有効回答者66名)、演習後に学生の共有経験; 中央値(最小値-最大値)は有意に上昇した (前: 37.5 (10-57)、後: 39.5 (12-57)、 $p=0.003$)。しかしながら、共有不全経験、および共有経験と共有不全経験の総和としての共感性については統計学的に有意な差は認められなかった (Fig. 3)。また、他者意識については外的他者意識と空想的他者意識には有意な変化は認められなかったものの、内的他者意識については演習後に有意な上昇を認めた (前: 24 (8-34)、後: 26 (11-35)、 $p=0.037$) (Fig. 4)。

考察

本演習が患者の気持ちを理解するのに役立つとする学生が多かった理由として、プロのSPによるフィードバックが重要な役割を果たしていると考えられる。SPは病態や身体症状だけでなく、家族構成、職業、および嗜好など時間軸とともに患者の日常の生活を細部までイメージするように訓練されている^{5,6)}。これによって患者個々の病気や治療に対する考え方や思い、そして患者としての個性が生まれる。それにより、SP特有のリアリティのある反応 (表情、言葉、感情の動き) がロールプレイで発揮され、フィードバックとして、その反応の生じた理由 (ロールプレイの際に出来ていた事実) が伝えられ

る。ロールプレイの最中に、突然、黙り込んでしまった患者の心の内（事実を誠実に伝えた言葉「医師の指示がまずかったと思います」が患者の不安を募らせていたetc.）や長い間、病と向き合っている患者の解釈（「退院おめでとうございます」の言葉でこんなにも喜んでくれたetc.）など、学生自身には思いもよらなかった事実と患者の感情に気づくことができている。この時、他者（SP）の感情をフィードバックによって認識し、理解・納得できたという経験が共有経験であり、逆に、SPの感情が理解・納得できなかった経験が共有不全経験に相当すると考えられる。本SP演習でこれらは共に増加すると思われた。しかしながら、今回、EESRを用いて測定した結果、共有経験のみが上昇した。角田によると、共有経験のみが高い場合には“同情”であり、これは自他を区別することなく生じている“未熟な共感”とされている。一方、現実の対人関係場面においては常に他者に共感できるとは限らず、むしろ相手の状況に関する情報が少なかったり、主体側の心理状態や相手との対人関係のあり方に応じて共有不全経験が生じるとされている³⁾。今回、学生は症例シナリオについてグループ学習を2日間行ったことで患者の事前情報が十分にあり、また、医療者は患者の気持ちに共感すべきであるという対人関係が学生の気持ちとして存在したために、共有不全経験が増加しなかったと考えられる。併せて、グループ内の他の学生が行うロールプレイを注意深く観察し、客観的に見た薬剤師役の態度がSPに対してどのような印象を与えたのかを考えながらフィードバックを聴くことで、他者への注意力が養われ、その結果として内的他者意識も向上したと考えられる。本演習で有意な上昇が見られた内的他者意識は、共感性と高い相関を持つとされている。さらに、相手の表情や言い方など非言語的表出の背後にある感情を直感的に理解する能力およ

び会話の文脈・状況を因果的に推論して理解しようとする能力との関連性も報告されている⁴⁾。

以上より、本演習では共有不全経験の有意な差は認められず、自他の個別性の認識を踏まえた感情の共有体験、つまり共感性の増加は確認できなかった。しかし、他者の内面への意識は有意に増加しており、また先行研究による内的他者意識と共感性の関連性を考慮すると、学生に他者の気持ちや感情に寄り添おうとする姿勢が芽生えつつあり、SP演習が共感的態度を養うための有用なツールとなる可能性が示唆された。

今回、他職種を理解するには至っていない現状が明らかとなったが、今後、処方設計に関わる医師と薬剤師の関わりを明記したシナリオを作成するなどして、より他職種連携の重要性を学習できるような演習としていきたい。また、今回の学習成果を得る上で必須であったSPは、現在、医療系の大学が主体となり全国で約数万人が養成されてきている。今後は、患者を深くイメージして演じる力および医療面接で感じたことを適切に言語化できる能力など、SPの“質”を高めていくことが重要だと思われる。

引用文献

- 1) 中野 重行, 菅原 英世, 坂本 真佐哉, 小関 哲郎, 上村 尚人, 丹生 聖治, 角南 由紀子, 松木 俊二, 梅月 恵美, 「心身症患者におけるプラセボ効果に関与する要因－医師患者関係, 治療意欲および薬物治療に対する期待度－」, 臨床薬理, Vol.3, No.1, 1-7 {1999}
- 2) 堀部 紗世, 大西 憲明, 高良 恒史, 横山 照由, 「京都薬科大学大学院におけるコミュニケーション教育：臨床薬学演習への模擬患者の参画とその有用性」, 医療薬学, Vol.30, No.8, 529-535 {2004}
- 3) 角田 豊, 「共感経験尺度改訂版（EESR）の作成と共感性の類型化の試み」, 教育心理学研究, Vol.42, 193-200 {1994}

- 4) 辻平治郎,「自己意識と他者意識」,第1版,北大路書房,京都,pp.149-178 {1993}
- 5) H.S. Barrows: “Simulated patients in medical teaching,” Canadian Medical Association Journal, Vol.98, 674-676 {1968}
- 6) 前田純子,「よりよき医療コミュニケーションを求めて—模擬患者を通して見えてきたもの—」,第1版,ライフサイエンス出版,東京,pp.7-18 {2011}